

大会「」と人気上昇

サッカー女子の日本代表(なでしこジャパン)が2連覇を目指す女子ワールドカップ(W杯)カナダ大会が盛り上がりを見せつつある。女子W杯は大会ごとに徐々に規模を拡大し、人気も着実に上昇。ただ、各チームの実力差が大きいことなど今後に向けた課題も多い。



■拡大路線

1991年に国際サッカー連盟(FIFA)主催の世界選手権として、第1回大会が中国で開催された。名称がW杯となったのは99年の第3回来国大会から。4年に1度の10年、女子サッカーは全



エクアドルに勝利し、スタンドで盛り上がる日本サポーター=16日、ウィニペグ(共同)

課題 実力差、チーム 待遇

世界で発展した。さらに広げていくために、参加チーム数を増やすことは重要だ」と今後も拡大路線を進める方針だ。女子の普及に力を入れるFIFAは、現在2900万人という競技人口を19年W杯までに4500万人まで増やそうと呼び掛けている。

■汚職も杞憂

その動きを後押しするよう、今大会の観客動員やテレビ視聴者数も伸びている。FIFAによると、1次リーグの36試合を終了した時点で総入場者数は前回大会を早くも上回り、約88万5千人に到達した。試合数が増えたとはいえ、過去最多だった99年米大会の約119万人を超える勢いだ。地元カナダが登壇した6日の開幕戦は約5万3千人を集めた。

■人工芝問題

一方でドイツが100でコートシボールを下したように、熱気に水を差すような大差の試合が目立つ。参加数が増えた今大会では強豪国と追いつく国との実力差が浮き彫りになっている。メキシコのクエジャル監督は「努力はしているが、差は大きい。状況はすぐには変わらない」と話す。サッカーだけで生計を立てられる選手はひと握り。環境面で国によって大きな違いがあるのが実情だ。

待遇面を見ても男子に比べて大きく劣る。今大会の賞金総額は前回の約2倍の1500万ポンド(約18億4500万円)となったが、男子の14年ブラジル大会は4億7600万ポンドと30倍以上多い。さらに今大会は男女のW杯を通じて初めて、体への負担が大きいとされる人工芝ピッチが使用されている。男子W杯は天然芝で、差別だとして米代表FWワンバック選手らがカナダの裁判所に提訴した。最終的に法的解決は断念したが、同選手は「女子スポーツをフェアに扱う動きが大きくなっていくことを期待する」との声明を出し、大会の在り方に一石を投じた。(共同)

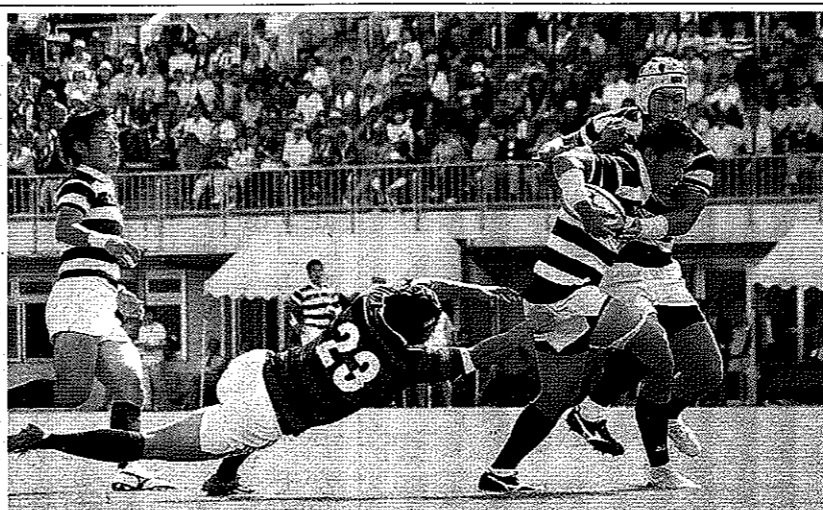
「みどり」援助士養成へ

在宅医ら 協会設立

高齢化に伴い、介護従事者向けに2日間、協会の養成講座を開く。初回は、在宅医らによる講演が中心となる。協会の養成講座は、終末期の患者の心身の痛みを和らげ、苦しみを受け止める方法や、リポートを提出すれば「エントロプライフ・ケア援助士」として認定される。2025年には年間死者数が現在よりも約30万人多い約160万人に達するとみられ、国は住み慣れた地域で過「せるよう医療や介護政策を推進している。

盛岡でラ

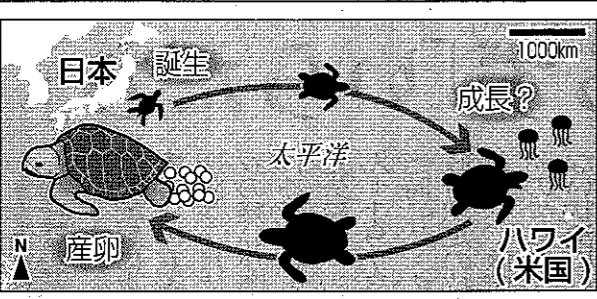
復興



東日本大震災の復興支援で開かれたラグビーの早稲田大・明治大戦で、プレーする選手たち。21日午後、盛岡市の盛岡南公園球技場

東日本大震災の復興支援を目的に、ラグビー関東大学春季大会の早稲田大・明治大戦が21日、盛岡市の盛岡南公園球技場で開かれた。伝統ある早稲田大と明治大の対戦は、双方の選手がぶつかり合う激しい攻防に、集まった3千人の観客からは大きな歓声が上がった。

名古屋港水族館(名古屋港区)は約20年前からアカウミガメの放流に取り組み、これまでに5千匹以上を太平洋に送り出してきた。調査で、多くが米ハワイ近海で成長することなど謎だった生態の一端を明らかにした。20年の歳月を経たアカウミガメの



ウミガメ、ハワイで成長

名古屋港水族館

放流20年、そろそろ帰還

て、最初に放流したカメがた鹿児島・屋久島周辺で産卵のため日本に帰還する。水族館は、産卵時期に差しかかるとみられるウミガメ飼育担当の松田乾さん(46)も喜びをかみしめている。人工繁殖の個体は野生に比べて体力が劣りがち。護のため放流に力を入れ、今年4月、2012年に沖縄・黒島で放流した絶滅危惧種タイマイが約千匹、世界で初めてアカウミガメ



名古屋港水族館の職員がアカウミガメに識別番号タグを付け、放流されるアカウミガメ。5月、愛知県蒲郡市

化に成功した。97年には絶滅危惧種に指定され、これまでに愛知・渥美半島海岸や千葉・房総半島などで、主に人工孵化したアカウミガメ計5038匹を放流している。一部は米西海岸まで回遊している。11年には米海洋大気局(NOAA)と共同で甲羅に発信器を付け、人工衛星で回遊経路を調査した。それまでの研究では、アカウミガメは黒潮に乗って

アカウミガメは長旅の中で成長し日本に戻って産卵する。発信器の電池寿命は2年と短く、甲羅の脱皮で発信器が外れるため、長期間の追跡調査は難しい。一方で大海を渡る期間や産卵する年齢など解明すべき課題はまだ山積みだ。

アカウミガメ 太平洋や大西洋、インド洋の熱帯から温帯域に生息するウミガメの一種で、体長は大きいもので1メートルになる。太平洋での産卵地は日本の関東以西の本州、四国、九州、南西諸島にほぼ限られており、日本での保護活動が重要とされる。産卵場の砂浜が減少したり、漁網にかかり死んだりして生息数が減少。旧環境庁が1997年、絶滅危惧種に指定した。寿命はよく分かっていないが、確認されている世界最長は、徳島県美波町の「日和佐」うみがめ博物館で飼育されている64歳の雄。